

【実践報告】

幼児の理解の報告

広島文教大学教育学部教育学科

准教授 牧 亮 太
教授 上 村 加 奈

1 はじめに

本科目は幼稚園教諭・保育士を目指す学生が1年次後期に履修する科目であり、逞しい実践力のある保育者になるための第一歩となる科目である(図1)。2日間の実地観察を通して、幼児の心の動きを捉え、記述するための方法を修得するとともに、子ども理解の重要性を体験的に理解することをねらいとしている。2019年度に開講して以降、毎年40～50名ほどが履修しており、2022年度の履修者は41名であった。

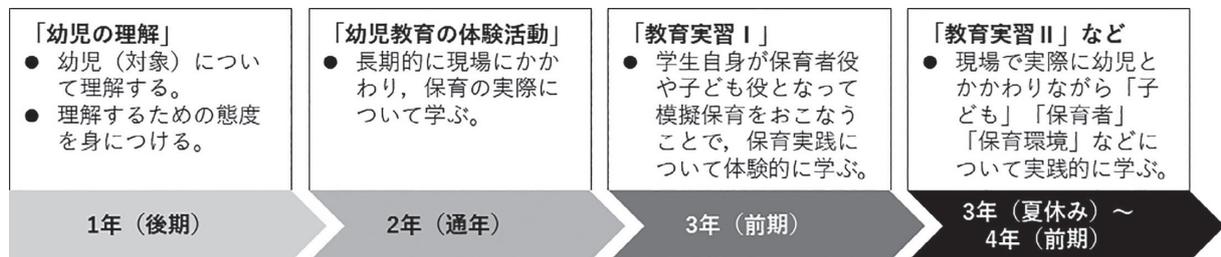


図1 教育学科幼児教育コースにおける実習関連科目の流れ

2 概要およびスケジュール

2022年度の実施スケジュールは表1の通りであった。実地観察①では、幼稚園の1日を観察し、活動の流れと学生自身が心を動かされた場面を記録にまとめた。実地観察後は記録を基にグループワークをおこない、エピソード記録の書き方を学んだ。実地観察②では自由遊びの時間に幼稚園を訪れ、子どもと一緒に遊びながらの参与観察をおこなった(1～2時間程度)。その後、最も印象に残った場面に関するエピソード記録を作成し、「児童の理解」「生徒の理解」を履修している学生と報告し合った(校種間交流)。

表1 2022年度の実施スケジュール

日にち	主な内容
9/29	ガイダンス
10/6	子ども理解の意義
10/13	心がまえ・諸注意
10/20	観察の目的
10/25, 26, 27	実地観察①
11/10	記録に基づいた討議 エピソード記録の書き方
11/17	エピソード記録に基づいた討議
11/21～12/9	実地観察②
12/15	討議と発表
1/12	校種間交流
1/19	校種間交流のふりかえり
1/26	まとめ

注：下線部は「児童の理解」「生徒の理解」と合同実施

3 成果と課題

授業後に子どもに対するイメージの変化について尋ねたところ、「とても変わった」「変わった」と回答した学生が、それぞれ27.0%、62.2%であった。その理由を見ると、子ども一人ひとりが違うこと、様々な思いを持っていること、子どもの言動には意味があること、といった学びがあったことがうかがえた。また、小学生や中学生と比較しながら、幼児の特性について理解を深めた学生もいたことから、他校種との合同実施による成果も確認することができた。

一方、グループごとにエピソードを報告し合う形式の校種間交流では、学生同士の質疑応答や情報交換が十分とはいえないため、校種間で連携することの意義をより実感できるような形式を検討していく必要がある。